

JAPAN CUP2025 日本選手権大会閉幕 素敵な笑顔と涙を見た4日間～感動をありがとう～

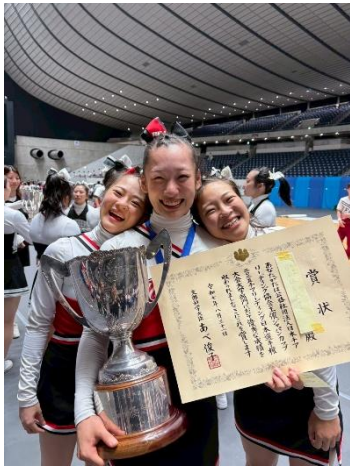
ジャパンカップ 2025 日本選手権大会は8月31日に最終日を迎え、チアリーダーたちの熱い戦いが幕を閉じました。たくさんの笑顔と涙を見た4日間。各部門の決勝が行われた最終日には国立代々木第一体育館が大観衆で埋まっていました。

自由演技競技ディビジョン1大学部門で、4年ぶりに日本一に返り咲いたのが日本体育大（東京都）。堂々とした演技で272.5点（総合404.5点）を獲得しましたが、ノーミスではなかったため、マットを去る選手たちの後ろ姿はどこか寂しげに見えました。

しかし、大学部門の最後に登場した大会3連覇中の帝京大（東京都）が「3層ピラミッドのスポッター不足」による安全規則違反を課されるなどのミスが続いて得点が伸び悩み（決勝243.5、総合377.0点）、日本体育大が逆転で優勝を手にしたのです。

悔し涙が、嬉し涙に変わった瞬間。選手たちの胸の内をよく知る日本体育大のヘッドコーチが、いつまでも泣く選手を抱きしめる姿がありました。それは、これまでの苦勞を感じることができる、とても素敵な光景でした。

何人かの記者に囲まれたヘッドコーチは、こんな話をしてくれました。

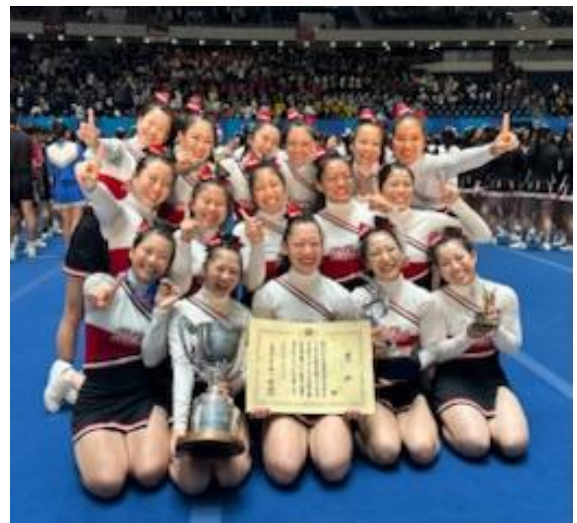


「この子たちはみんな『夢の日本一をつかみたい』って言うんです。でもね、夢じゃないんですよ。叶わないけれど、それでも叶えたいと思うのが『夢』であって、私たちが日本一を取り戻すのは『夢なんかじゃないんだよ！』って言い続けてきた。帝京大学さんは追い越したくても、ここ数年は追い越せない存在でした。ミスはあったけど、私たちでも優勝ができるんだっていうことを見せてくれた。届かないと思っていた子たちが『夢』じゃなかったんだと証明してくれた。日本一になることは夢じゃないと分かったから、これからはもっと練習を頑張ると思いますよ」

4年ぶりの優勝をつかみ取った日体大4年生

大会直前にトップの中心選手がアキレス腱を断裂。マットに立つはずだったその選手は病院から会場に駆けつけて客席から仲間に声援を送っていたそうです。

「手術を終えたばかりなのに、松葉杖で来てくれたんです。優勝を届けられて良かった」心から嬉しそうに、ヘッドコーチがそう語る言葉に、チームの「絆」を感じました。



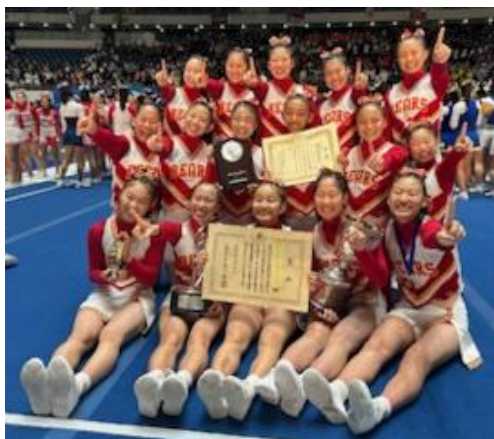
ディビジョン1大学部門を制した日体大

表彰式が終わり、感動的な光景がありました。

観客席から身を乗り出し、まるで子供のように泣きじゃくっていたのは箕面自由学園高（大阪府）の選手でした。怪我もあってメンバーから外れ、サポートにまわっていた彼女は、仲間が日本一をつかんでくれたことに感動して誰よりも泣いていたのです。

彼女たちの姿に、チアリーディングという競技の魅力が詰まっているような気がします。

マットに立つ 16 人は大きな責任とプレッシャーを背負いながら、仲間や保護者、コーチ、OG・OB から支えてくれる人たちのため、2 分 30 秒に努力の全てをかける。報われる努力があれば、報われなかった努力もあるでしょう。仲間とともに流した汗と涙があり、それらの一瞬、一瞬、全ては青春の 1 ページとして輝いたのです。



高等学校部門優勝の箕面自由学園高



箕面自由学園高の演技

ディビジョン 1 高等学校部門で初めて決勝のマットに立った広島県瀬戸内高や福岡工業大学附属城東高。大学部門で敗者復活から這い上がり、準優勝した梅花女子大（大阪府）。そして 4 連覇を目指した帝京大は「負けた」経験が、チームをこれまで以上に強くすることでしょう。

このレポートに書ききれないほどの感動が、夏の終わりの代々木第一体育館にありました。

皆さんの挑戦は、これからも続きます。

来年もまた、素敵な笑顔と涙が見られるのを、楽しみにしています。感動を、ありがとう。



大学部門 準優勝の梅花女子大



大学部門 第 3 位の帝京大

本サイトの記事、写真の転載はご遠慮ください。無許可の転載・複製は法律により罰せられます。

Unauthorized reproduction or duplication is punishable by law.